

平成 28 年度 熊本県立大学大学院文学研究科日本語日本文学専攻

学位（課程博士）論文審査報告

論文執筆者氏名 宮本 恵美

学位の種類 博士（文学）

学位記番号 甲 第 47 号

学位授与の日付 平成 29 年 3 月 16 日

学位授与の要件 学位規定（平成 5 年 4 月 1 日）第 3 条第 3 項

学位論文の題目 失語症者における構文ネットワーク構造の実証的研究

学位審査委員会

主査 馬場良二 本学 教授 日本語教育 博士(学術)

副査 半藤英明 本学 教授 日本語学 博士(文学)

副査 鈴木 元 本学 教授 日本文学 博士(文学)

副査 中村裕子 (株) 日本ヒューマンヘルスケア研究所代表  
前聖隷クリストファー大学大学院教授  
言語聴覚障害学 博士(医学)

## 論文要旨

本研究で執筆者は、失語症者の構文ネットワーク構造を認知言語学的視点から調査、分析することによって、現在行われている一般的な失語症の言語評価と言語治療の内容を再検討し、改善点を明確化して、新たな方法を提案している。

第1章では、本研究を構想するに至った理由である現在の失語症者に実施されている文レベルの評価法及び訓練法に関する問題点を取り上げ、また、その問題の理解を深めていくために、失語症者の言語機能にはどのような特徴があるのか、その概要を述べている。さらに、本研究の理論的基盤となる認知言語学の概要と「カテゴリー化」、「プロトタイプカテゴリー」、「ネットワークモデル」、「構文ネットワーク」、「使用基盤モデル」、「言語習得モデル」、「カテゴリーとしての動詞や格助詞」を取り上げ、適確に説明している。

失語症患者の言語症状には、「紙を破る」の「ヤブル」は理解できているにもかかわらず、「約束を破る」の「ヤブル」の理解には困難を示す、また、「リンゴを食べる」のような対格用法の「ヲ」を使用した発話は比較的多く認められるにもかかわらず、「道を歩く」のような場所格を使用した発話は極端に少ないなどが見られる。しかし、現状の言語治療では、評価に関しても、訓練に関しても、「ヤブル」なら「紙を破る」の意味、「ヲ」なら対格の用法しか取り上げておらず、語の多義性に関する知見が不足している。そこで、その複数の意味用法の間のプロトタイプ、拡張、スキーマから成る階層性、認知言語学でいうところのネットワーク構造に着目し、研究をすすめている。

執筆者は、失語症者の格助詞の構文ネットワーク構造を明らかにするために、失語症者の格助詞の使用について、どのような誤りが生じやすいのか、先行研究を通して概観し、次に、失語症者の格助詞「デ」、「ニ」、「ガ」、「ヲ」の構文ネットワーク構造について、失語症者および健常中高年者の助詞の穴埋め課題と文想起課題を実施した。

助詞の穴埋め課題は、「昨年、結婚した。今年、家（ ）建てた」のような設問を1期目で84問、2期目で108問を用意し、各設問で【の、で、へ、が、と、を、に】などの選択肢から助詞を選ばせた。文想起課題では、各格助詞を使った発話を5つ想起するよう指示をしている。対象は、前者が26名、後者が20名の軽度失語症者（助詞穴埋め課題では中程度失語症者も）で、平均年齢60代後半である。

これらの設問は、穴埋めとなる発話の前に一文を用意し、文脈を与え、さらに、複数の回答が可能にならないよう選択肢を精選した。これは、日本語教育の知見を援用したものである。

第2章では格助詞「デ」、3章で「ニ」、4章で「ガ」、5章で「ヲ」の実験について述べ、構文ネットワーク構造について検討、軽度失語症者の格助詞の構文ネットワー

ク構造において、中心的な意味用法（プロトタイプ）は比較的良好に保たれており、活性化しやすい状況にあること、また、周辺の意味用法（拡張）については、活性化しにくく、情報の往来が遮断されているような状況にあることを示した。ここでは、統計的に、各助詞のネットワーク内のプロトタイプの用例の理解度が高い失語症者が多いことを示すだけでなく、各被験者内の結果において、周辺事例の誤りが目立つがプロトタイプは保たれているということはあっても、その逆はないことを示す被験者の数が多くを占めていることを明らかにしている。

さらに、各章の分析結果をもとに、各格助詞について、失語症者に実施する評価法と訓練法の提案を行っている。まず、評価法では、例えば、格助詞「デ」は、「場所」、「道具」の用法、「ヲ」は「対格」など中心的意味用法からそれぞれ周辺の用法にむけて調査していく方法を提案している。また、訓練方法は、評価結果をベースに完全には保たれていないと判断される用法の中でプロトタイプにより近い用法から開始し、その用法を繰り返し使用していくことやイメージ図を用いることによってスキーマ形成を図ることを提案した。以上のように、各格助詞に関する意味用法別のネットワーク構造を想定し、詳細な評価法を用いて、各失語症者がどのレベルまでの理解と表出が可能かを明らかにすることで、開始段階や訓練の遂行順などについて設定することを示している。

すべての実験において失語症者に対するのと同じ課題を、平均年齢 60 歳の脳血管障害など、認知機能と言語機能に関わる疾患の既往のない健常者 15 名に行っている。穴埋め課題に関しては、健常者であれば回答できること、そして、正解が一つであることを確認するため、該当しない課題文は削除した。文想起課題に関しては、失語症者の回答と比較検討するためである。健常者にも課題を実施することにより、実験の精度と信頼性を確保している。

第 6 章では、本研究のまとめとして、格助詞「デ」、「ニ」、「ガ」、「ヲ」の全体の関係から分析した結果、格助詞「ガ」と「ヲ」は、格助詞「デ」、「ニ」と比べて再習得しやすいのではないかとしている。このことから、失語症者に対する格助詞の訓練は、「ガ」と「ヲ」の用法から開始し、その後、「デ」と「ニ」へ移行していく方法をとることが有効であると示唆された。さらに、あらためて現在まで失語症者に行われてきた評価法と訓練法の問題点について取り上げ、失語症者に認知言語学的理論を基に実施した実験と研究の成果および意義について述べている。

## 論文評価

本論文は、認知言語学的視点から格助詞に着目した様々なパターンの課題文を作成し実施することによって、失語症者の格助詞「デ」、「ニ」、「ガ」、「ヲ」の構文ネットワーク構造について明らかにしたことにより、失語症者への新たな評価法及び訓練法の提案をすることが可能となり、今後の言語聴覚療法の分野に大きな示唆を与えることに成功している。

語が多義であり、文脈によって使い分けられていることは日本語学、言語学、日本語教育においては当然のことであり、その意味用法を形態論的、統語論的、意味論的に記述していくことが言語記述の基本である。言語治療においても言語学は大きな役割を果たしてきているが、語の多義性についての成果は、未だに取り入れられていない。

失語症者の言語機能評価に用いられている「標準失語症検査」の聴覚的理解課題において、格助詞では「ガ」、「ヲ」、「ニ」、「デ」、「カラ」、「ト」など、動詞では「見る」、「読む」、「食べる」、「取る」などが取り上げられ、それぞれの語の比較的中心的な意味用法のみが対象となっている。例えば、この検査で使用されている格助詞「デ」を用いた発話は「櫛でマッチを触ってください」という「道具の用法」だけであり、他の用法の理解が可能かどうかは明確にならない。さらに言えば、道具の用法が理解できていれば、格助詞「デ」の用法すべてが理解できていると考えていると言えよう。

日本語教育で言うなら、格助詞「デ」の用法には、動作の場所を表わす「東京で彼に会った」、道具、方法を示す「はさみで切る」、「バスで行く」、材料「紙で花を作る」、「小麦粉でパンを焼く」、動作が行なわれている時間や行われることになる時を表わす「30分で単語を覚える」、「3時で授業が終わる」、動作の行なわれる状況「はだしで歩く」、量的限定「3個で500円」などがあり、大体この順番に提示、学習される。これらの「デ」は結びつく名詞にも、動詞にもそれぞれ特徴があり、意味が異なっていて、出現も別単位となることが多い。学習者に混乱をきたさないためである。言語治療には、このような言語構造に対する周到さがたりない。

執筆者は、この点に着目し、認知言語学の知見と理論を援用、緻密な実験によって失語症者の構文ネットワーク構造を明らかにしている。その成果が、日本コミュニケーション障害学会の全国誌『コミュニケーション障害学』33-3、2016の「失語症者における構文の多義ネットワーク構造の検討～格助詞「デ」を中心に～」であり、『日本認知言語学会論文集』2015の「失語症者の多義ネットワーク構造について－格助詞「ヲ」を中心に－」、そして、熊本保健科学大学『保健科学研究誌』2015の「失語症者の格助詞の誤りに関する考察～格助詞「ニ」を中心に～」であり、言語治療と認知言語学との両学術分野に貢献する論文を發表している。さらに、日本語教育に関わる「失語症者と日本語学習者の日本語能力の類似点と相違点について～中国語母語話者と失語

症者の4コマ漫画の説明の比較～」を熊本県立大学大学院『文学研究科論集』2012に掲載している。

この研究は、執筆者が言語治療の現場での疑問、必要性を発端とし、学会で認められるだけの有効な成果を得た。そして、失語症者に対する実験とその考察によって、格助詞「ガ」、「ヲ」、「デ」、「ニ」における構文ネットワーク構造の理論をさらに強化することができた。特に、統計的に、各助詞のネットワーク内のプロトタイプの用例の理解度が高い失語症者が多いことを示すと同時に、各被験者内の助詞の理解状況において、周辺事例の誤りが目立つがプロトタイプは保たれているということはあっても、その逆はないことを示す被験者の数が多いことを明らかにした点は意義深い。さらに、失語症者の助詞穴埋め課題に対する正答率は「ガ」(90.0%)、「ヲ」(86.1%)、「デ」(81.4%)、「ニ」(77.5%)で、認知言語学理論における認知的際立ち度の差に基づく主格「ガ」、対格「ヲ」間、および、それらとその他の格「ニ」、「デ」間に見られる階層性と平行するものであった。この点は助詞を個別に見るだけでなく、4つを比較対照することで初めて明らかになったことである。これは、認知的際立ち度に基づく助詞間の階層性の実在性を失語症者の言語機能障害の特徴から支持するものとなり、認知言語学の理論を補強するものである。また、失語症者のネットワーク構造の特性がプロトタイプカテゴリーの心理的実在性を示す根拠となり、認知言語学の中で重要な枠組みであるプロトタイプ理論の発展に大きく貢献しうる。

失語症者は母語、日本語を保持しているもののその日本語にアクセスする回路、脳が損傷を受けている。一方、日本語学習者は脳、および、脳に蓄積された言語にアクセスする回路は健常で、日本語という構造物が未構築な状態にある。大きな違いがあるものの、両者が日本語を話せるようになりたい、あるいは、理解する必要があるという点は共通しており、今後、両分野の協働が加速するものと思われる。

本研究は、認知言語学の知見を援用して、言語治療に寄与する評価法、訓練法を提案、さらに、認知言語学の理論を実験によって具体化した研究であり、これは、まさに画期的、先進的研究と言える。さらに、言語治療と日本語教育とを言語教育という枠組みでとらえたとき、日本語教育への貢献も期待される。

「文学研究科日本語日本文学専攻博士後期課程学位申請論文における審査および学位授与の決定にかかる基準について」の審査基準を満たしており、博士(文学)の学位授与が適当であると判断する。